

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第29号

目次

教養教育とアーカイヴズ

河西 秀哉 2

企画展紹介：

京都帝国大学文学部の軌跡
—教養と国策のはざまで—

富永 望 4

公開資料紹介：

滝川事件関係スクラップ

西山 伸 5

日誌 6

大学文書館の動き：

「原爆展関係資料」をご寄贈いただき
ました 7

人の動き 7

講書始と京都大学

富永 望 8



1915年の京都帝国大学全景

吉田山から現在の本部構内を撮影したもの。時計台はまだない。矢印の建物が文学部（関連記事4頁）。

教養教育とアーカイヴズ

神戸女学院大学文学部准教授 河西 秀哉

私は、2005年5月から2010年4月まで、京都大学大学文書館において助手・助教として勤務していました。その間や法人文書や個人文書の受入・整理・公開の業務に携わりながら、大学アーカイヴズのあり方や社会におけるアーカイヴズの役割などについて考える機会を与えていただきました。

2011年4月からは、神戸女学院大学文学部総合文化学科に、日本近現代史を担当する教員として勤務しています。総合文化学科は、リベラルアーツ（専門分野を学びつつ、同時に幅広い知識と教養を身につける）を目標に掲げた学科です。一方で知識の専門化を目指すと同時に、他方ではできるだけ幅広い学問分野を学び、学際的な交流をはかろうとする学科とも言えます。そこに入学してくる学生の興味関心も様々です。一つの問題に関心を強く持ちながら同時にそれとは別の分野にも興味を持つ学生、多様な観点を幅広く学びたいという意識を持った学生……など。また一方で、どんな物事にも興味関心を抱かない／抱いていない学生がいるのも事実です。こうした様々な意識を有している学生たちに、広い教養を身につけてもらうというのが私の仕事になります。一つの専門を深く探求して学ぶ、京都大学の学部教育とは少し異なっているかもしれません。

それゆえ、私の講義では、自分の専門である象徴天皇制の歴史について15回全部を話すものもありますが、日本近現代史全般について1回ごとにトピックを話すものもあります。日本近現代史を専門に学ぶ／興味関心を持つ学生だけが私の講義を履修するわけではないので、日本近現代の政治・社会・経済・文化などの様々な局面を紹介し、その歴史の諸特徴を知ってもらうことで幅広い教養を身につけ、自分の専門分野と結びつけてほしいという意味を込めています。この講義を履修

するのは、宗教学・哲学・文学・社会学……など多様なゼミに所属している学生です。時には、学科や学部を越えて、音楽や理系の学生が履修することもあります。

その講義の中で、アーカイヴズについて話をする機会を毎年1回設けています。それは、学生の多くがアーカイヴズというものの存在を知らないからです。図書や雑誌が所蔵されている図書館は学生たちにとっても身近な存在のようで、すべての学生が行ったことはあると答えます。モノが所蔵されている博物館も、展示を見に行ったことがある／企画展示の案内を駅などで見て存在は知っているという学生が多いようです。しかし、アーカイヴズ／文書館とは何ですか？という問いを発すると、学生からの反応はあまりありません。これまで講義をした時の経験では、行ったことは？と聞くと、誰もいませんでした。図書館や博物館に比べ、その認知度はかなり低いと思われます。

そこで、私の京都大学大学文書館での勤務経験を踏まえながら、日本近現代史の講義の中で、アーカイヴズとは何か、その機能などについて話をすることにしています。

ここで気をつけているのが、抽象的な概念だけではなく、自身に身近な話題から始める点です。まず、学生が大学の事務室に提出する文書はいったいどうなるのかを考えさせます。しばらくすれば廃棄される文書もあります。しかし、その後も証拠書類として必要となってくるケースもあるでしょう。ではそうした書類が年々積み重なった時、どうなるか。事務室は文書でいっぱいになってしまうのではないか。そのように説明していくと、学生はそうした文書を保存していく場所が必要だと気づいてきます。それがアーカイヴズであり、廃棄するか保存するかを判断するのがアーキヴィストだと話を展開していきます。

また、就職などで在学証明書が必要となるケースなども紹介します。もし卒業して何年後かに転職する時、どのようにしてその人が在学していたことやその時の成績を証明することができるのか。つまり、記録として残しておく必要があるわけです。こうしたデータの集積地としての意味も、アーカイヴズにはあることを説明します。その他、大学での様々な決定が過去の出来事を参照していること、それを記録保存しているのがアーカイヴズであることなどを説明していくと、次第にアーカイヴズが自身の生活にも密接にかかわっていることを学生は理解していくようです。

そして、大学だけではなく、一般社会においても記録の保存が必要で、そのためにアーカイヴズがあり、文書を保存していることを伝えます。「消えた年金問題」を例にして説明すると、何人かの学生がこの問題を記憶していて、記録することや文書を保存することの意味の重要性をさらに認識していくようです。今後生活していく時にも、アーカイヴズが自身に密接にかかわることを講義を通して学ぶことができればと思っています。

最後に、歴史研究においてもアーカイヴズは意義ある施設であることを説明しています。このテーマはだいたい講義15回の一番最後に行くのですが、それまでの回で展開してきた日本近現代史の講義は、何を基になされてきたのか。本や論文に書かれた研究蓄積だけではなく、アーカイヴズに所蔵されている一次史料から読み取り、私自身が歴史像を構築していることなども講義では展開しています。以上のような講義を行うことで、学生はアーカイヴズという場の意味を理解していくことになります。

ところで、日本近現代史を専攻する私のゼミの学生は、この講義を聞いた後、ゼミの時間に実際にアーカイヴズへ見学に行くようにしています。一昨年度は京都府立総合資料館、昨年度は京都大学大学文書館を案内していただきました。実際に書庫に入れていただき、文書が保管されている様子を見ることで、学生たちはよりアーカイヴズというものの存在を身近に感じ、その意味を理解するようです。また、文書の受入・整理・公開の業務に携わ

っている方々から話を聞き、そして実際に文書を見ることで、アーカイヴズへの興味をより深めていく学生も数多くいます。こうした経験を経ると、4回生で卒業論文を作成する時、積極的にアーカイヴズを利用して史料を閲覧する学生があらわれます。このように、学生のアーカイヴズへの興味関心を高めていくのも、教養教育として、また専門教育への橋渡しとして意義のあることだと考えています。

私の勤務する総合文化学科では、その後大学院に進学して歴史研究を追究する、歴史学に関係した職業に就くという学生はそれほど多くはありません。その意味では、今後歴史研究のためにアーカイヴズを利用するヘビーユーザーとはならないでしょう。しかしだからこそ、教養として、アーカイヴズという施設があり、市民として生活していく中でどのように関わりを持つのかを意識して欲しいと考えて、教育を行っています。学生にとって、今まで知らなかったアーカイヴズの存在を理解し、その役割を学ぶことで、自身のこれからにとっても何らかの形でかかわりを持つ施設なのだと認識していくのではないのでしょうか。



京都大学大学文書館見学の様子

企画展紹介

京都帝国大学文学部の軌跡 —教養と国策のはざまで—

京都大学大学文書館助教 富永 望

大学文書館は2015年11月10日（火）から2016年1月17日（日）まで、百周年時計台記念館歴史展示室において、企画展「京都帝国大学文学部の軌跡—教養と国策のはざまで—」を開催します。本展示では、戦前の文学部の歴史を大きく3つの時期に区分し、大学文書館所蔵の資料を手がかりにして、その軌跡を追っていきます。

テーマ1 京都帝国大学文科大学の創設

京都帝国大学が創立されたのは1897（明治30）年ですが、文科大学の設置自体は当初から予定されていました。文科大学は哲・史・文の3学科編成でスタートすることになりますが、特に東洋学の研究を重視する姿勢が見られました。また、学生が自分の専門分野のみに偏ってしまうことのないよう、最初の2年間は学科の枠を越えて幅広く普通講義を受講し、その後で特殊講義・演習の受講を許可し、最終学年（医科大学以外は3年制）に専門的研究へ進ませるようにしました。教官に対しても授業の負担を少なくし、研究に多くの時間を割けるように配慮していました。文科大学は広い教養を身につけた上で独自の研究に進むことを理想に掲げ、1906（明治39）年に発足します。



文科大学開設二関スル省令及勅令按議決ノ件（1906年）

テーマ2 自由な学風と多様な研究

1919（大正8）年、京都帝国大学文科大学は京都帝国大学文学部となりました。創設以来、個性的な研究者を集めてきた文学部は、多種多様な研究成果を世に出していくことになります。そもそも東京帝国大学が帝国大学の卒業生のみを教授に任用していたのに対して、京都帝国大学は学歴・職歴にあまりこだ

わりませんでした。たとえば東洋史の内藤虎次郎（湖南）は新聞記者、国文学の幸田成行（露伴）は作家でした。西洋文学の教授には外国人を招かず、日本人による研究を目指し、「山のあなたの空遠く」の訳詩で知られる上田敏（柳村）を、英文学の教授として招聘しました。このコーナーでは、著名な研究者の肖像写真と著作を並べて展示しています。

テーマ3 文学部と総力戦体制

1931（昭和6）年の満洲事変以降、軍部の暴走に歯止めがかからなくなり、全体主義が日本社会を覆っていきます。1933（昭和8）年の京大滝川事件、1935（昭和10）年の天皇機関説事件は政府による学問統制の動きを加速させました。この間、京大は1934（昭和9）年に京都帝国大学満蒙調査会を発足させ、陸軍の庇護下で満洲・蒙古の学術調査を進めていきます。文学部も参加し、『満和辞典』編纂のような成果をあげました。アジア・太平洋戦争で日本の劣勢が明らかになった1943（昭和18）年、在学徴集延期が停止され、文学部生も学徒出陣に赴きます。大学に残った者も勤労動員で勉学どころではなくなりました。

1945（昭和20）年8月に日本の降伏で戦争が終結すると、戦争協力に積極的だった教官の多くは、占領下の公職追放・教職資格審査で大学を去ります。そして教育改革により、京都帝国大学文学部は京都大学文学部となって今日に至ります。



セイス教授、羅振玉来学記念写真（1912年）

最後に、本展示にご協力いただきました附属図書館・文学研究科図書館・法学部図書室にこの場を借りてお礼申し上げます。

公開資料紹介

滝川事件関係スクラップ

京都大学大学文書館教授 西山 伸

大学文書館では、2013年12月より『滝川事件関係スクラップ』を公開している。本資料は、縦370mm、横290mmのスクラップブックに、滝川事件に関係する当時の新聞記事、学生の作成した資料など175点が貼り付け、あるいは挟み込まれているものである。

そのうち大部分は新聞記事で166点に及び、事件が表面化した1933年5月上旬から、松井元興が総長に就任する直前の7月上旬まで、断続的に集められている。紙名は表記されていないが、『大阪朝日新聞』が中心のようで、「天声人語」や同紙京都版の投書欄「カクテル」も何点か見ることができる。

新聞記事以外の資料としては、学生作成の「退学願」、父兄各位に宛てた京都帝国大学法学部学生一同の声明書（5月26日付）、同じく父兄各位に宛てた京都帝国大学法学部・経済学部・文学部学生一同の声明（6月4日付）、7月上旬に学生の全学組織が発行したと思われる『京大全学通信』第5号などが目を引く。

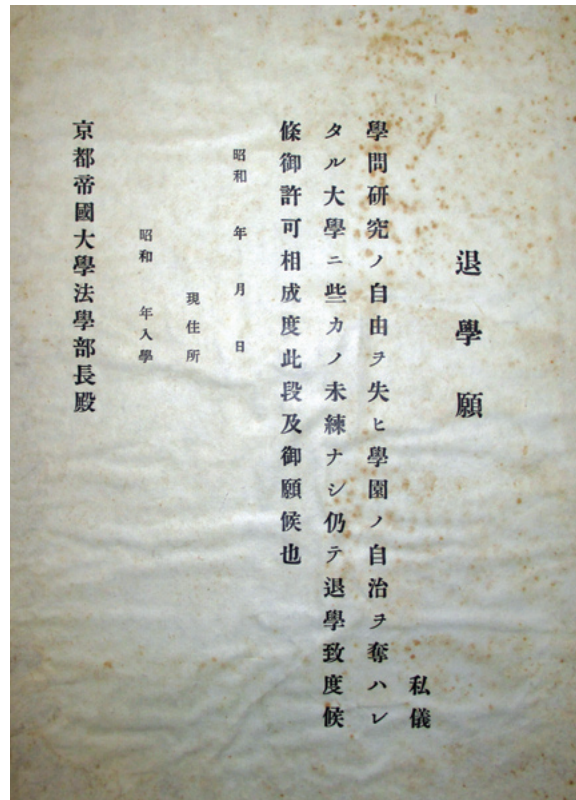
その中で、本稿で取り上げるのは「退学願」である（写真）。これは京都帝国大学法学部長宛で、本文は「私儀学問研究ノ自由ヲ失ヒ学園ノ自治ヲ奪ハレタル大学ニ些カノ未練ナシ仍テ退学致度候条御許可相成度此段及御願候也」とある。そして、日付と現住所、入学年を記入するようになっているが、本資料に残された退学願は記入されていないひな形である（なお、氏名を記入する場所がないが、現住所の横などに記載することを想定していたと考えるのが自然だろう）。

これは当時法学部教授会支持を打ち出し、文部省による滝川処分に反対していた法学部学生が、滝川の処分発表とそれをうけた法学部教官の総辞職表明に合わせて作成し、集約しようとしたものと考えられる。筆者は、このとき法学部学生だった河東倍男の日記を以前紹介したことがある（『京都大学大学文書館研究紀要』第9号、2011年）が、その中にこの退学届に関する記載がある。5月30

日なので教官総辞職表明の4日後、「本日ハ昨日井上ヨリ聞イタノデ本日退学届ヲ書キニ学校ヘ行ク。第八教室ニ姫高ノ連中ガ頑張ッテ居テソコデ書カサレル。コノ届ハ集メテ結束ヲカタメルト云フ政策的ノ意味ヲ持ツモノデコレガ提出ニハー一応全員ニ計ッテ定メルト云フコトデアル」と河東は記している。このとき学生の活動は出身高校単位で行われていて、退学届もその単位で集約されていたことが分かる（河東は姫路高校出身）。

どれくらいの学生が、退学届に署名したのか定かではないが、日記の文面から想像できるようにどちらかといえば傍観者のだった河東も加わったのだから、かなりの数に及んだかもしれない。

原史料ならではの生々しさが本資料から伝わってくる。



〔日誌〕(2015年4月～9月)

2015 年

- 4/ 1 再雇用職員二塚伸和雇用。
- 4/ 1 同志社大学人文科学研究所より、申請書類に関する照会。
- 4/ 1 東京女子医科大学史料室より、海外在住者の資料利用申請への対応に関する照会。
- 4/ 1 毎日新聞社より、学徒出陣に関する取材のため来館。
- 4/ 2 西山教授、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。
- 4/ 6 学内より、職員録に関する照会。
- 4/11 植田修弘氏より、植田弘美受講ノート寄贈。
- 4/13 富永助教、オランダ・アムステルダム自由大学一行に展示案内。
- 4/17 大学文書館教員会議。
- 4/24 長倉禮子氏より、長倉久子受講ノート寄贈。
- 4/30 『京都大学大学文書館だより』第 28 号発行。
- 4/30 立川康人氏より、「たけみ会誌」平成 26 年 6 月号寄贈。
- 5/ 8 NHK より、学徒出陣に関する取材のため来館。
- 5/11 間島正史氏より、間島正美遺品寄贈。
- 5/12 TVC-NET より、ヤクルト社内報・チラシ作成に関する取材のため来館。
- 5/15 大学文書館教員会議。
- 5/19 学外より、「壬辰会雑誌」「嶽水会雑誌」に関する照会。
- 5/19 西山、坂口助教、文学研究科及び人間・環境学研究科における法人文書管理状況を視察。
- 5/20 読売テレビより、京都大学の歴史に関する取材のため来館。
- 5/27 オルタス・ジャパンより、NHK 番組「ファミリー・ヒストリー」製作に関連する取材のため来館。
- 5/29 立教大学池袋図書館より、経済学部に関する照会。
- 6/ 1 オフィス・アシスタント梅藤夕美子雇用。
- 6/ 1 学内より、京都大学附属病院西地区デイケア診療棟に関する照会。
- 6/ 2 NHK より、学徒出陣に関する取材のため来館。
- 6/ 2 東京大学文書館より、資料の燻蒸に関する照会。
- 6/ 5 日本テレビより、京都大学における原爆研究に関する照会。
- 6/ 8 西山、New Education Expo2015(於・東京ファッションタウンビル)において「『自校史教育』を考えるー京都大学での試み」と題して講演。
- 6/ 8 読売新聞社より、時計台前の楠に関する照会。
- 6/ 9 学外より、桜田一郎・李升基に関する照会。

- 6/10 学内より、大学文書館所蔵写真に関する照会。
- 6/10 京都新聞社より、戦後京都における資料の収集・保存状況に関する取材のため来館。
- 6/10 西山、坂口、宇治キャンパスにおける法人文書管理状況を視察。
- 6/12 神戸新聞社より、旧制第三高等学校と京都大学の関係に関する照会。
- 6/15 日本テレビより、荒勝文策に関する照会。
- 6/16 成城学園教育研究所より、狩野亨吉肖像写真に関する照会。
- 6/16 坂口、ポケット・ゼミ「アーカイブ資料管理の実践」受講生に大学文書館施設の案内。
- 6/17 大学文書館教員会議。
- 6/20 尾形敏明氏より、シーボルト誕辰記念会写真寄贈。
- 6/22 日本経済新聞社より、大学アーカイブズに関する取材のため来館。
- 6/23 西山、富永、桂キャンパスにおける法人文書管理状況を視察。
- 6/25 法人文書管理等に関する研修会を開催。
- 7/ 1 「第2回全国大学史展 学生たちの戦前・戦中・戦後」(全国大学史資料協議会東日本部会・明治大学史資料センター主催、7月3日～8月2日)に所蔵資料貸出。
- 7/ 3 水と緑と詩のまち前橋文学館展示「ガリ版印刷の魅力と不思議 PART2」(7月18日～8月23日)に所蔵資料貸出。
- 7/ 6 NHK より、桑原武夫に関する照会。
- 7/ 7 廿日市市役所より、大野陸軍病院写真に関する照会。
- 7/10 京都産業大学図書館より、山口茂一に関する照会。
- 7/14 同志社大学社史資料センターより、歴史展示室に関する照会。
- 7/16 新潟放送より、平澤興に関する照会。
- 7/17 大学文書館教員会議。
- 7/17 学内より、安馬彌一郎に関する照会。
- 7/21 法政大学大原社会問題研究所より、『京都大学大学文書館だより』に関する照会。
- 7/22 NHK より、折田彦市像に関する照会。
- 7/28 西山、あしなが育英会「京都学プログラム」において「History of Kyoto University」と題して講演。
- 7/29 国際基督教大学より、大学文書館の施設及び業務視察のため来館。
- 7/31 事務補佐員木元真美退職。
- 8/ 1 事務補佐員安井千尋雇用。
- 8/ 3 西山、企画展について記者説明。

8/ 4 企画展「「あの一年」の京都大学」開催（於・百周年時計台記念館歴史展示室、～10月4日）。

8/ 4 KBS 京都より、企画展取材のため来館。

8/ 4 西山、福岡県立筑紫高等学校生徒に「大学って何をするとところ？」と題して講義。

8/ 6 オープンキャンパス 2015 開催（～8日）。

8/ 6 川合一良氏より、原爆展関係資料寄贈。

8/ 8 西山、京都大学オープンキャンパス2015において「大学って何をするとところ？ー近代日本の歴史から考えるー」と題して講演。

8/14 学内より、学旗に関する照会。

8/21 NHK より、大野陸軍病院調査班遭難者に関する照会。

8/21 京都産業大学図書館より、学生集会所等に関する照会。

8/24 事務補佐員黒岩美和雇用。

8/24 大学文書館教員会議。

8/27 フジテレビより、大野陸軍野戦病院調査班遭難者に関する照会。

8/28 関西大学図書館より、佐々木惣一関係資料寄贈。

8/31 是枝義雄氏より、寄せ書き入り日の丸寄贈。

9/ 1 京都新聞社より、寄せ書き入り日の丸に関する取材のため来館。

9/ 7 学内より、卒業アルバムに関する照会。

9/11 NHK より、大野陸軍病院調査班遭難者に関する取材のため来館。

9/14 末松正邦氏より、旧制高等学校関係資料寄贈。

9/15 共同通信社より、米国人文学科学顧問団に関する照会。

9/28 大学文書館教員会議。

9/30 大学文書館運営協議会。

大学文書館の動き

「原爆展関係資料」をご寄贈いただきました

大学文書館は、このほど川合一良氏より「原爆展関係資料」をご寄贈いただきました。1951年7月、京都大学の学生自治会同学会の主催で、京都駅前の丸物百貨店を会場に「総合原爆展」が開催されました。各学部の学生や教員たちが、原爆の被害を伝える資料を手作りで展示し、10日間の会期で約3万人が来場するという大きな反響を呼びました。この成功をうけて、占領下という困難な状況のなか各地で原爆展が開催されていきました。

こうした原爆展については、長らくその存在が歴史に埋もれていましたが、1991年に川合氏を中心とした当時の学生たちなどが「原爆展掘り起こしの会」を発足させ、資料の発掘や聞き取り調査などの活動を積極的に続けてこられました。二十数年にわたって同会が集めてこられた資料が、今回当館に寄贈されるに至ったわけです。

本資料は合計で約2700点、総合原爆展や地域の原爆展に関する資料のほか、新聞記事や原爆展掘り起こしの会の活動に関する資料など、内容は多様です。当館では、1年を目途に整理をし、一般公開に向けて準備を進めていきたいと考えています。

人の動き（2015年4月～2015年9月）

2015年4月1日 富永望、大学文書館助教に就任。

講書始と京都大学

京都大学大学文書館助教 富永 望

皇室には古来から様々な行事が伝えられているが、そのうちの一つに「講書始の儀」（以下、講書始）がある。宮内庁のHPによると、講書始は、毎年1月、皇居において、天皇・皇后が人文科学・社会科学・自然科学の分野における学問の権威者から説明を聴く儀式である。皇太子をはじめ皇族が列席し、文部科学大臣、日本学士院会員、日本芸術院会員などが陪聴する。講書始は、1869（明治2）年、明治天皇が学問奨励のために定めた「御講釈始」がそのはじまりとされる。当時は国書と漢書についてのご進講が行われ、その後、洋書も加わるようになり、1953（昭和28）年からは、現在のように3つの分野から行われるようになった。歴代の進講者はそうそうたる顔ぶれであり、当代一流の研究者が名を連ねている。もちろん、京大から研究者が選ばれて進講者を務めることも珍しくない。

「文部省往復書類 自大正2年 至大正10年6」（識別番号01A00390）の中に、1922（大正11）年12月27日付で文部省から京都帝国大学総長荒木寅三郎宛に送られた通牒が収められている。それによると、同月25日付で宮内大臣牧野伸顕から文部大臣鎌田栄吉に、次年度の講書始進講者の候補として京大の研究者を指名してきたので、取り計らってほしいということであった。指名されたのは漢書に狩野直喜、洋書の補欠として織田万である。翌年1月4日、荒木総長は文部省宛に狩野と織田の出講を了承する旨を知らせている。

もっとも、1923（大正12）年の講書始は行われなかった。当時、既に大正天皇は病状が悪化して公務に耐えられず、皇太子裕仁親王が摂政を務めていた。講書始も皇太子が代行するはずであったが、このとき皇太子の体調が思わしくなかったために、中止となったのである。ただし、3月26日に織田が「国際裁判ニ就テ」と題する臨時進講を行っており、これが講書始の埋め合わせとされたらしい。進講の内容は不明である。狩野の方は翌1924（大正13）年の講書始に出講し、「尚書堯典の大意」と題して進講している。その後も京大からは講書始の進講者が選ばれているが、残念なことに大学文書館で所蔵している資料で関連するものは、先のものを含めて4

件しかない。

さて、昨年9月に公開された『昭和天皇実録』巻26には、進講について興味深い記述がみられる。1939（昭和14）年10月27日、昭和天皇が百武三郎侍従長に対して、次のように述べたのである。

近時京都学派など哲学的に歴史を研究する風潮があることを指摘され、進講者はその系統は不可にて、科学的に研究する学者を可とする御意見を述べられる。また、国史研究者につき、皇室に関することは何も批評論議せず、万事を可とするが如き進講は、聴講しても何の役にも立たずと評される。

実証的な研究者の進講でなければ、聴講する価値がないという天皇の要望については、すぐには実現しなかったらしい。翌1940（昭和15）年1月23日の講書始において国書の進講者を務めたのは、京大で国史学第1講座と日本精神史講座を担当していた西田直二郎であった。京大からは4年ぶりの選出であったが、彼は文化史学を提唱した人物として知られる。学生の中にマルキシズムが広がるのに対抗して、思想界・学界を匡正するために設置された、国民精神文化研究所の所員を1934（昭和9）年以来兼任していた。教え子の回想によると、講義では荘厳な口調で皇室崇拜を説いたとされる。戦時下の国家的修史事業にも度々関与することになる西田が、天皇の意に添わない人選であったのは明らかである。西田の進講の題目は「日本書紀神武天皇の御紀 橿原開都の御条・御即位の御条の一節並に御鴻業の御蹟」という長大なもので、大学文書館にその草稿が保管されている（未公開）。内容は、ひたすら神武天皇を称揚し、神武天皇以来日本が君民一致の国柄であったことを強調するというもので、昭和天皇が不満を覚えたであろうことは想像に難くない。

戦後の講書始は前述のとおり3つの分野から人選が行われるようになった。京大から選出される進講者も自然科学の分野が目立っており、講書始は期せずして、アカデミズムの動向を映し出す鏡の役目を果たしているといえる。